

脾と胃の病証と治療

神奈川県・平馬医院 平馬直樹

はじめに

今回から、この講座は臓腑の病証と治療方剤の解説に進む。臓腑の病証を理解するためには、基礎知識としてその臓腑の生理機能を把握する必要がある。そのうえでよくみられる病証について病態、症候を理解する。治療にあたっては、その病証に適応する治法を知り、その治法を実現するための基本方剤を覚え、方剤の働きと、構成生薬（組成）から、なぜその方剤が該当する病証を改善する力があるのかを理解しておけば、類似の病証にたいしても応用力が養成されるものと思う。臓腑の病証と治療は脾胃から始める。

1. 脾の生理機能

脾の生理機能を表1にまとめた。飲食物の消化吸収（運化）を行い、生命活動に必要な物質とエネルギーを自然界から得るのが最も重要な働きである。

消化吸収した飲食物のエッセンス（水穀の精微物質）は気と血になり、全身に供給される。全身をめぐるためには気と津液を全身に運ぶ肺（肺主気、通調水道）、血を全身にめぐらせる心（心主血脈）に精微物質を運搬しなければならない。脾より上位の膈の上にある臓の肺と心に運搬するために、脾の気は上向きに精微物質を昇らせる働きがある。それが昇清作用である。脾の昇清機能が低下すると中気下陷という病証を呈する。

表1 脾の生理機能

- 1) 運化を主る。運化は運輸、消化の意
水穀（飲食物）の運化。後天の本。気血も脾で化生水液の運化
- 2) 昇清を主る。
運化機能の前提条件となる脾の機能の特質
胃の降濁作用と対になり、互いに協調的に働き、消化管のダイナミックな蠕動運動の源となっている
- 3) 統血を主る。
血液が経脈の中を流れるのを統攝し、脈外に逸出するのを防止している。脾気の摂と脾陽の温の働きによって統血している

統血は、血脈にたいする脾気の固摂作用のことで、統血作用が失調すると出血傾向を招く（脾不統血証）。

2. 脾に属する組織・器官、液、情志

中医学の臓象学説では、全身の諸機能を、五臓を首とする5つの機能型に分類している。脾の病証を理解するためには、脾に属する組織、器官、さらにはその分泌物や脾に関連する精神情緒なども把握する必要がある。これらの病変はすなわち脾を中心とする系統の病証ととらえることができるので、診断上有力な情報を与えてくれる。

臓腑には表裏関係があり、表裏をなす臓と腑は機能面でも密接な協力関係があり、病理面でも互いに強く影響することがある。脾と表裏をなすのは胃である。また、脾は運化すなわち消化・吸収、腸管の蠕動の中枢であるので、小腸・大腸の機能も脾および胃と密接に関連する。

表2からわかるように、筋肉の羸瘦や四肢の脱力感、味覚の異常、唇の色沢、口内に涎があふれる、思い悩むなどの所見はみな脾の病証と関連している可能性があり、診断の手がかりになる。

表2 脾に属する組織・器官、液、情志

- 1) 腑にあつては胃と表裏をなす
- 2) 脾は運化すなわち消化・吸収、腸管の蠕動の中枢であるので、小腸・大腸の機能も脾及び胃と密接に関連する
- 3) 筋肉に合し、四肢を主る
- 4) 口を開竅し、その華は唇にある
- 5) 液にあつては涎となす
- 6) 志にあつては思となす

3. 胃の生理機能

脾と表裏をなす腑である胃の生理機能は表3にまとめた。

受納とは飲食物を収納することで、水穀の腐熟は、消化の準備という意味合いであろう。

脾が飲食物の精微物質を上向きに肺・心に昇らせるのにたいして、胃は飲食物が消化された不要な物質（糟粕）を下向きに、小腸、大腸に送る働きをしている。すなわち胃気は下向きの「降」が順調な働きである。体にとって不要な濁を最終的には糞便として体外に排出するのは胃と大腸（ともに陽明経）の協調作用である。脾の昇清作用と胃の降濁作用とは対になり、互いに協動的に働き、消化管の

ダイナミックな蠕動運動の源となっている。脾気と胃気は逆向のベクトルを持っていて、全身の気の昇降にも関与している。「脾昇胃降」と覚えておこう。胃の降濁機能が失調すると胃気不降による便秘，胃気上逆による嘔吐，ゲップ，しゃっくりなどが現れる。

表3 胃の生理機能

- 1) 受納を主る
- 2) 水穀を腐熟する
- 3) 降をもって和となす
「脾昇胃降」

4. 脾と胃の生理的特徴

表4のように「脾は燥を喜び、湿を悪む」「胃は潤を喜び、燥を悪む」という格言がある。脾は乾いた状態が好調で、湿邪に侵されると機能低下する。胃は津液（胃陰）に潤されていると順調で、胃陰の不足で燥の状態になると胃熱を生じたり、胃気が乱れて病理状態に陥る。

表4 脾と胃の生理的特徴

「脾は燥を喜び、湿を悪む」

「胃は潤を喜び、燥を悪む」

5. 脾胃病の症候

脾の病によくみられる症状は、上記の脾の機能が失調して、脾に属する組織器

官にもその影響が波及した腹脹腹痛、泄瀉、便澹、浮腫、脱力感、出血などである。

胃の病によくみられる症状は、受納機能の異常や、胃気の上逆による食欲異常、心下痛、嘔吐、噯気、呃逆などである。

6. 脾胃の病証

脾と胃の主要な病証を表5のように10病証選び、順次解説する。1)～4)は脾の虚証、5)6)は脾の実証、7)9)は胃の虚証、8)、10)は胃の実証である。

表5 脾胃の病証

1)脾気虚証	6)湿熱蘊脾証
2)脾陽虚証	7)胃陰虚証
3)中気下陷証	8)食滞胃脘証
4)脾不統血証	9)胃気虚寒証
5)寒湿困脾証	10)胃熱(胃火上炎)証

1) 脾気虚証 (全身の気虚証+運化機能の減退)

[病態] 脾気が不足して運化機能を充分發揮できなくなるため、消化は緩慢になり、飲食物から得る精微物質を全身に輸布(輸送、散布)できなくなる。水湿もさばけなくなるので水湿内停、さらに痰飲を生ずる。

[症候] 食欲不振、食べるとすぐ腹がいっぱいになり腹脹。摂食すると水穀の運化のために脾気が消費されるので、食後に眠くなったりだるくなったりする。大便は下痢気味となる(便澹)。だるく手足に力が入らない。むくみっぽい。顔色はむくんだように白っぽい。舌質淡苔白、脈緩弱。

[治法] 補気健脾

[方剤] 四君子湯(『和剂局方』)

人参・白朮・茯苓・炙甘草

方中の人参は薬性が甘温で、大補元気・健脾養胃の効があり、主薬である。苦甘温の白朮は健脾益気だけでなく、脾の湿をさばく燥湿和中の効があり、臣薬である。佐薬の茯苓は甘淡平で、健脾補中滲湿。白朮と茯苓の組み合わせは、きわめて相性がよく、すぐれた健脾除湿の作用がある。使薬の炙甘草は甘温益気調中で、4味をあわせて、バランスの取れた益気健脾のユニットとなっている。

脾虚には、運化機能の低下に伴う虚性の気滞腹満が合併することが多い。その場合は理気薬を配合する。陳皮を加えたものが、異功散である。陳皮を加えるこ

とによって脾の運化を補助する効能が増す。

脾虚により痰湿が旺盛になり、悪心嘔吐を伴うものには、半夏・陳皮を加えた六君子湯を用いる。六君子湯は、すなわち四君子湯合二陳湯である。脾肺気虚の喀痰の多い咳嗽にも用いられる。

気滞により腹痛を伴うものには、六君子湯に理気薬の香附子・木香・縮砂を加えた香砂六君子湯を用いる。食欲不振にも効果がある。

2) 脾陽虚証（脾失健運＋陰寒内盛）

【病態】 脾気虚がさらに発展して、脾の陽気が衰え、陰寒が体内で盛んになりお腹が冷え、寒凝気滞が起こると腹痛する。湿をさばく機能は無力となる。

【症候】 脾気虚の症候に腹痛、不消化下痢便、四肢の冷えが加わる。腹痛はさすつたり温めると緩和する。浮腫が現れやすく、女性であれば薄く透明な帯下の量が多い。舌胖大質淡苔白滑、脈沈遅無力。

【治法】 温中祛寒

【方剂】 理中丸（『傷寒論』）

人参・乾姜・白朮・炙甘草

本方は薬性が辛熱の乾姜と甘温の人参を組み合わせて、乾姜で中焦を温め裏寒を除くと同時に、人参で中焦の気を補い、その運化機能を回復する。さらに健脾燥湿の白朮と益気和中の甘草を配合して中焦を調える。

冷えの程度が重く、全身の寒象も顕著であれば、附子を加えて附子理中丸として用いる。浮腫が顕著であれば理中丸合真武湯が効果的である。

3) 中気下陷証（昇提無力）

【病態】 脾気が不足して、昇精機能が失調し、中焦の気を昇提する力がなくなる。

【症候】 脾気虚の症候に加えて、胃下垂・脱肛などの内臓下垂、めまい・たちくらみなどが現れる。起立性調節障害、脳貧血症などにもこの証が多い。

【治法】 益気昇陽

【方剂】 補中益気湯（『脾胃論』）

黄耆・人参・白朮・炙甘草・陳皮・当帰・柴胡・升麻

黄耆は脾肺の気を補い、陽気を昇提させる功にすぐれ、本方の主薬である。人参・炙甘草の甘温益気でこれを補助する。健脾の白朮、理気の陳皮、補血の当帰は佐薬で、脾の運化の失調により血の化生も低下している場合、当帰の養血の効能がこれを補う。柴胡・升麻は、陽気を昇挙する働きがあり、黄耆の作用を助け、全体の薬効の上向きのベクトルを強めている。

4) 脾不統血証（脾気虚＋出血）

【病態】 脾気が不足して、全身にめぐる血脈を引き締め、血液が漏れ出さないように働いている統血機能が失調し、血液が皮下や体外に漏出する。

【症候】 主として下血と不正性器出血（崩漏）の場合を、脾不統血という。気虚による出血でも、その他の出血は、「気不摂血」と呼ぶことが多い。しかし、

血尿、皮下出血、鼻出血などの場合も脾不統血という場合もある。

これらの出血に加えて、同時に脾虚の症候がみられる。脈細弱。

[治法] 益気摂血

[方剤] 帰脾湯（『濟生方』）

人参・黄耆・白朮・茯苓・木香・炙甘草・当帰・竜眼肉・酸棗仁・遠志

黄耆と人参は補脾益気、竜眼肉と当帰は養血安神で、この組み合わせが気血双補、補心脾となっている。白朮の健脾と木香の理気醒脾は黄耆・人参を助け、茯苓と酸棗仁は養心安神で竜眼肉・当帰を助けている。遠志は寧心安神で動悸・不眠に伴う煩躁不安を解除する。炙甘草は諸薬を調和するばかりでなく、四君子湯中の益気調中と炙甘草湯中の通利血脈の効能を兼ねている。

脾不統血証に用いるのであれば、阿膠・艾葉などの養血止血の薬物を加えると、より効果的である。

5) 寒湿困脾証

[病態] 水分を過剰に摂取すると、脾はその水湿をさばくことができなくなる。

逆に脾の生理機能が失調すると内湿を生じやすい。脾胃に内停した寒湿は脾気の機能を阻害する。また、胃気にも影響し中焦の気機が失調し、胃気が上逆することがある。

[症候] 腹が脹って気持ちが悪い。食欲不振、下痢、悪心嘔吐。手足が重くだるい。

頭が重く何かをかぶったよう、あるいは布を頭に巻いているよう。小便が近く、浮腫を生じやすい。舌胖大質淡苔白膩、脈濡または滑など。

[治法] 散寒利湿・温陽健脾

[方剤] 実脾飲（『濟生方』）

乾姜・附子・白朮・茯苓・木瓜・厚朴・木香・草菓・大腹皮・甘草・生姜・大棗

辛温の附子・乾姜で脾腎を温め、腎の利水と脾の運化機能を回復する。白朮・茯苓は健脾利湿、木瓜・厚朴・木香・草菓・大腹皮は行気化湿、大棗・生姜・甘草で脾胃を振興させる。

6) 湿熱蘊脾証

[病態] 湿熱の邪は中焦に停滞しやすい。脾胃が湿熱に侵されれば、脾の運化機能が損なわれ、中焦の気のめぐりが滞る。だるさが顕著となる。皮膚のかゆみや黄疸が出現することもある。

[症候] 腹が脹り痞えて苦しい。食欲がなく悪心。大便はベタツとした下痢で嫌な臭いがする。小便が近く濃い。倦怠感が強い。黄疸・皮膚のかゆみ。発熱する場合は、微熱がいつまでも続く。舌質紅苔白黄膩、脈濡数。

湿熱証は、陰の性質をもつ湿邪と、陽の性質をもつ熱邪があわさって形成される。どちらの邪が重い(優勢)かによって、症候に差が出る場合がある。熱邪が重ければ、便秘がちになり、小便が濃い黄色で、舌苔が黄膩を呈する。湿邪が重ければ、体が重だるく、便通は下痢気味となり、舌苔は白膩であることが多い。

【治法】 清熱化湿・運脾和胃

【方剂】 芩連平胃湯（『医宗金鑑』）

黄芩・黄連・蒼朮・厚朴・陳皮・甘草

平胃散に黄芩と黄連を加えた組成。清利湿熱の黄芩・黄連で脾胃の湿熱を除き、燥湿運脾の蒼朮と行気化湿の厚朴・陳皮で脾の運化機能を回復する。熱が重い湿熱では、さらに茵陳、大黄などを加えるとよい。湿が重ければ草薢、茯苓などを加えるとよい。

7) 胃陰虚証（胃の津液不足）

【病態】 胃は、燥を惡む。胃の機能が失調すると津液が不足し、胃の陽気が偏り亢り、虚熱が内生する。鬱熱が胃に停滞し、胃気のめぐりが失調する。心下が痛む。胃気が上逆し、腑氣が通ぜず、大便秘結する。

【症候】 みずおちが痛み、飢餓感があるのだが、食べたくない。乾嘔、しゃっくり。口燥咽乾、大便秘結。陽明経脈は上行して齒齦に絡するので、齒の痛みや齒肉出血がみられる。舌質紅少津苔少、脈細数。

【治法】 養陰益胃

【方剂】 玉女煎（『景岳全書』）

石膏・熟地黄・麦門冬・知母・牛膝

石膏と知母は白虎湯の中核となる組み合わせで、胃熱を清解する。熟地黄と麦門冬は胃陰を滋養する。牛膝は上亢した胃熱を下へ引き下げる働きがある。

8) 食滞胃脘証

【病態】 飲食物が胃に停滞し、胃の腐熟機能が發揮されない。胃気のめぐりも失調する。胃に鬱熱が生ずる。消化不良の状態。

【症候】 みずおちが脹って痛み苦しい。嫌な臭いのげっぷがしきりに出る。酸っぱいものが口中に込み上げてくる。便通は不安定になり、時に不消化な便を下す。舌苔厚膩、脈滑など。

【治法】 消食和胃

【方剂】 保和丸（『丹溪心法』）

山楂子・神麴・萊菔子・半夏・陳皮・茯苓・連翹

方中の山楂子は肉食や脂っこいものによる食積を解消し、君薬である、酒の飲みすぎや腐敗物による消化不良を解消する神麴と、胃気を降ろして消化を促進する萊菔子が臣薬として配される。中焦に食積が停滞すると脾胃の生理的機能を損なって痰湿を生じたり化熱しやすい。半夏・陳皮・茯苓はすなわち二陳湯であり、脾胃の痰湿気滞を解消する。連翹は化熱の予防に用いられる。もし、化熱がはっきりしていれば、黄連・梔子などの清熱薬を加える。脾胃の気滞が重ければ枳実・厚朴などの行気薬を加える。便秘するものには檳榔や少量の大黄を加えて陽明（胃・大腸）の腑氣を通ずる。

9) 胃気虚寒証（胃脘痛＋寒象）

【病態】 この証は陽気の不足という虚の側面と、寒邪内停という実の側面とを兼ねる虚中挟実証である。寒邪が胃の腑に凝滞すると、胃の気がめぐらなくなり（寒凝気滞）、みずおちの痛みが出現する。脾の陽気も損なわれ、脾の運化機能も失調する。

【症候】 みずおちがひきつれるように痛み、冷えると痛みが増強、温めると楽になる。口に薄い唾液が込み上げて、口は渴かない。舌質淡苔白滑、脈遅または弦緊。

【治法】 温胃散寒

【方剤】 黄耆建中湯（『金匱要略』）

黄耆・桂枝・芍薬・甘草・大棗・生姜・膠飴

膠飴は甘温で温中補虚、和裏緩急の功。辛の桂枝は脾陽を温通、酸の芍薬は養陰舒筋（ひきつれを解除）。桂枝に甘草を配せば辛甘化陽、芍薬に甘草を配せば酸甘化陰で営衛・気血・陰陽を調和して脾胃を調える。黄耆で温中補気し脾気を温め補う。大棗・生姜・甘草で脾胃を振興する。

10) 胃熱（胃火上炎）証

【病態】 ふだんから辛いもの、油っぽいものを好む人は、胃に鬱熱を生じやすい。あるいは、カゼなどの感染症に際して病邪が陽明経に入ると化熱して胃熱を生ずる。胃火は上へ昇りやすく、口内の炎症を起こしやすい。同時に胃中の濁気も上逆する。また、熱により胃は乾燥し、潤いを失い、腑気も通じなくなるので大便秘結する。

【症候】 みずおちの灼熱痛。口渇多飲、冷たい飲み物を好む。げっぷ、嘔気、口臭、口内炎、舌炎、歯肉が腫れる。大便秘結、小便濃く少量。舌質紅苔黄、脈滑数。

【治法】 清胃瀉火

【方剤】 白虎湯（『傷寒論』）

石膏・知母・粳米・甘草

胃熱を清解する力量にすぐれる石膏を主薬として、薬性は苦寒ながら、潤燥生津の効能のある知母を臣薬として配する。甘草・粳米は益胃護液（胃気を調え胃の津液を保護する）の効がある。あわせて清熱除煩止渴の効にすぐれる。

もし、気の消耗と津液の損傷が進んでいれば、益気生津の効を補強するため人参を加えて、白虎加人参湯として用いる。

7. 脾胃の病証に用いる薬物

以上に紹介した方剤の組成を理解しやすいように、脾胃の病証に用いる薬物を作用によって分類して表6に示す。

表6 脾胃の病証に用いる薬物

作用	薬物
補脾気	人参 黄耆 山薬 白扁豆 白朮 茯苓 大棗 甘草
温脾	乾姜 山椒 呉茱萸 肉桂 附子 烏薬
昇拳脾気	黄耆 人参 升麻 柴胡
理中気	枳実 枳殻 陳皮 木香 蘇梗
去湿健脾	白朮 茯苓 蒼朮 藿香 半夏 厚朴 砂仁 薏苡仁
養胃陰	麦門冬 石斛 沙参 玉竹 天花粉
清胃熱	石膏 黄連 黄芩 知母 芦根
瀉胃	大黃 芒硝
和胃降逆	旋覆花 代赭石 半夏 丁香 柿蒂 刀豆子
消食	山楂子 神麩 麦芽 攪榔 莱服子 鷄内金

プロフィール

平馬直樹 (ひらま・なおき)



●現職

平馬医院院長，日本医科大学東洋医学科講師

●略歴

1978年 東京医科大学卒業

同年 北里研究所附属東洋医学総合研究所医局 入局

1987年 中国中医研究院広安門医院 留学

1990年 牧田総合病院牧田中医クリニック診療部長

1996年 平馬医院副院長，後藤学園入新井クリニック漢方診療部長を兼任
現在，平馬医院院長。2005年より日本医科大学東洋医学科講師

●著書

『図解よくわかる東洋医学』共著（池田書店・2005年）

『中医学の基礎』監修（東洋学術出版社・1995年）